

僕と釣りと魚

涼一

あるところに、釣りをしてみたいと思っている少年がいました。

幸運なことに、その少年の住んでいる村には、川がありました。

少年は、おじさんが偶然、川で釣りをしているのを見かけて釣りをしたくなりました。

そしておじさんに聞きました。

「おじさん、どうやったら魚が釣れるの？」

というとおじさんは何も答えません。それどころかイライラしています。

「しっしっ、あっちいってろ！」

そう言われたので少年はあわてて逃げてしまいました。

でも魚がやりたい。どうしてこんなに汚い川で釣れるのかわからない。

「そうだ、釣り具屋さんに行こう。」

そして少年は近所の釣り具屋さんに行ってたけざおを買いました。

「糸はこんな感じで針はこんな感じ。」

少年は思ったまま針と糸をつけました。

そうして川に行って釣りをするものの釣れません。

「なんで釣れないんだろう。」

ずっとおじさんのように構えているのに。

そこにガキ大将がきていました。

「お前、釣りなんかしてるのか、どうだい釣れたかい？」

「何にも釣れないんだよ。針つけたのに。」

「針だしてごらんよ。」

少年は針を出してみせました。

するとガキ大将は言いました。

「ばっかでね一の。えさもつけねえでつれるわけねえじゃん。」

「あはは、ば一か。」

そう言って少年のさおを取り上げて折ってしまいました。

「なにするんだよ！」

「あはは、ばかのすることはばかばか。」

少年は泣き崩れました。

お金も出したのに、つりざおも買って糸もたらしてはりもつけたのに、釣れない。

でも一つ学びました。魚はえさがないと食いつかないということです。

釣り具屋さんに行くとえさは「みみずがいい。」

と言われました。

少年はミミズがどこにいるか父親に聞いて、土の中にいるということがわかりました。

せっせと土を掘りました。15匹ぐらいとれました。

それでも15匹とるのに一時間かかりました。

それで今度は折れない鉄のさおをかって糸を垂らしてリールというのが良いということで自分なりに仕掛けを作りました。

そして釣りに望みました。

けれども一日中釣りをしたけど釣れません。

少年はとうとう釣りをやめてしまいました。

月日が経ち、少年はおじさんになろうとしている頃でした。

「あの頃、そう言えばここで機嫌の悪いおじさんがつりをしてたっけ。」

そうすると青野頃のおじさんがひょっこり現れてずいぶんとじいさんになっていましたがそのおじさんだと少年は気づきました。

「おじさん」

「？」

「あんときの坊やか」

「しばらくしないのに大きくなったな。かおがおもかげがある。」

おじさんははなしをつづけました。

「あんときはわかったね。おれもね、家庭のことで逃げ出したかったんだ。」

今度は優しく釣りのコツをおじさんは教えてくれました。

合わせのコツ。浮き下。えさ。どこに魚がいるか。いつ釣ったらいいか。

おじさんのとおりにするとどうでしょう、どんどん釣れていきます。

少年はびっくりして釣りってこんなに面白いんだと思いました。

と同時に少年の子供時代を思い出しながら、釣りたい場所でも粘って釣りたい。

と思うようになりました。

少年とおじさんは仲良くなりよく一緒に釣りをしました。

釣りたいときに釣りたい場所で。

少年は年をとってから結婚をしました。

結婚する前のデートも釣りでした。

子供ができて子供と一緒に釣りにも行きました。

ルアーでも釣りができるようになりました。文字どおりはりで釣りができるようになったのです。

「あんときのガキ大将何してるかな。おれは、はりでつつたぞ。」

そしてあのときのことを思い出してふふとわらいました。

少年は何より釣りを愛していました。

また時が経ち

じいさんになり、妻も死んで子供も大きくなりました。

妻が死んだ孤独を埋めるのはやっぱり釣りでした。

「アルプスの川で釣りたい。」

釣りたいときに釣りたい場所で。

そしてとうとうアルプスに来て川に行って自分の釣り場書を見つけて
釣りをするのでした。おしまい。

僕と釣りと魚

<http://p.booklog.jp/book/64101>

著者：涼一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maruchansakana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64101>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64101>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ